

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新人職員には入職時のオリエンテーションで、法人理念について説明し、理解を深めてもらえるよう取り組んでいる。人事評価の際、理念の理解、実践について、個人の評価を行っている。法人理念とは別にユニット目標を設け、半期ごとに評価し、サービス向上に繋がるよう取り組んでいる。	母体の経営理念を基に、地域密着型事業所として目指すべきところについて職員間で話し合い、事業所独自の年間目標を作り上げ職員全体への理解浸透を図り、管理者と職員は共有し、会議の中でも振り返りの機会を設けている。日々の中でも話し合う機会を持ちながらサービス向上に活かしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設の夏祭り行事に地域住民を招待し、交流を図っている。運営推進会議にも地区の区長さんに加わっていただき、地域との交流が深まるよう取り組んでいる。	利用者が地域の中で安心して暮らしていくことが出来るようにとの思いから自治会に加入し、事業所行事等の発信を行い交流を深めている。また、事業所で行われる夏祭りや「オレンジカフェ」の開催日には地域の方々からも来所してもらい、交流を深めながらどなたでも気軽に立ち寄れる事業所を目指している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年度より地域貢献事業の一環として、地域包括支援センターが主催するオレンジカフェを、事業所で開催し、地域住民の認知症の相談、援助に努めている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は民生委員、地域包括支援センター職員、地域区長、利用者ご家族代表、施設長、相談員の構成員で、併設特養と合同で2か月に1回開催し、現状、活動報告を行い、会議での意見を、サービス向上のため、反映するよう努めている。	会議では事業所の状況報告とともにサービスの実際について報告を行い、質問や意見をもらいサービス向上に活かしている。今年度は利用者についてはメンバーを特定せず、より多くの利用者、家族の参加も得ていただけることも視野に入れつつ進めていく試みもあり、会議が更に有意義なものとなることが期待できる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	事業所の実情や運営に関する疑問点について、市の担当者に相談するようにしている。運営推進会議の構成員である地域包括支援センター職員に、相談報告を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についてのマニュアルを整備し、研修を通じて職員の理解を深め、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	身体拘束委員会が中心となり、年2回研修会が行われている。具体的な行為や言葉による拘束について理解を深め、「人権を守ることがケアの基本である」という認識のもと、抑圧感のない自由な暮らしの支援に努めている。また、研修後のアンケートにより日々のケアを振り返る機会としている。気になることがあればその場で職員への声掛けを行い改善に向けている。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修を通じて学ぶ機会を設けている。管理者並びに職員が虐待を見過ごさないよう取り組んでいる。働き方改革に合わせ、全職員が有給を取得しやすい環境を作り、ストレス軽減に繋がるよう取り組んでいる。	身体拘束と同様研修会で学ぶ機会を設け、対象となる行為についてお互いに意識し合い、虐待のないケアを目指している。日々の関わりの中でも寄り添い本人の話に耳を傾け安心して過ごしてもらっている。また、管理者は職員の様子を観ながら声をかけたり職員の疲労が蓄積されないように、有給を取得し易い環境づくりにも取り組んでいる。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業、成年後見制度について、職員が学ぶ機会はないが、成年後見制度を活用されている利用者もあり、それらを活用できる支援ができるよう取り組んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、不安や疑問点を解消できるよう、十分な説明を行い、理解、納得を図っている。改定等があった際は、その都度書面送付し、了解を得るよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日頃より利用者の意見や要望を聞くよう努め全職員が情報を共有し要望に沿えるよう努力している。ご家族代表に運営推進会議に出席いただき、その際、運営における意見を収集し、反映できるよう取り組んでいる。	利用者からは日々の関わりの中で意見を聞くように努め、家族からは運営推進会議の中や面会時、電話の中でも意見を伺っている。出された意見は職員間で検討し運営に反映させている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員からの意見を聞く機会として、ユニット会議、主任会議、全体会議を設けており、運営に反映できる意見は取り入れるよう努めている。人事評価の個人面談でも、管理者が、意見、要望を聞くよう努めている。	管理者はユニット会議や、主任会議、全体会議の折など日常的に職員との会話の機会をもち、要望を聴きだすようにしている。出された要望は会議でも話し合わせ、アイデアの取り上げ等もあり運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤務状況を把握し労働超過にならないよう配慮している。人事評価制度で、職員個々の実績を評価し、賞与、昇給時に反映し、向上心が持てるよう取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修に加え、外部講師による全体研修、キャリアパス制度に即した外部研修を受ける機会設け、職員のスキル、意識の向上が、サービスの向上に繋がるよう、取り組んでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	入所申し込み促進のため管理者が外部、居宅事業所を訪問し情報交換を行い交流を図っているが、それ以外で同業者と交流する機会は持っていない。		
II 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	不安解消するため、寄り添うケアを心掛け、常に要望を聞くよう配慮し、安心していただける関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約時に十分な話合いの機会を持ち、その後も継続して要望、相談に応じ、家族との信頼関係が築けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前面接で収集した情報を基に、初期の段階で家族と情報交換を行いケアプランに反映し、必要とされる支援が行えるよう取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者のできることを見極め、意見を尊重した上で、調理補助や片づけなどの軽作業を、生活の中の役割として行っていただき、より良い相互関係が築けるよう取り組んでいる。		
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者、家族との絆を重視し、家族には定期受診の付き添いや、衣替え、外出支援などの協力を役割としてお願いしている。共に本人を支える関係が築けるよう取り組んでいる。	毎月利用者の様子や職員との関りを伝え安心してもらっている。また行事への案内や参加の呼びかけも行っている。家族からは通院付添いや衣替え時期の協力もあり、家族の思いにも寄り添いながら、共に本人を支える場面づくりの支援に努めている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの関係性を大切に考え、できる限り要望に沿えるよう、支援に努めている。	在宅時から利用している美容院に行き続けている利用者があり、「カフェ開催時」に来所する地域の方々との会話を楽しんでもらう機会もあり、出来る限り本人が地域住民との継続的な交流が出来るよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士、より良い関係性築き、孤立しないよう、席のレイアウトを変更したり、職員が配慮するよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	随時、連絡がとれるよう体制づくりに努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で、個々の希望、意向の把握に努め、経過記録用紙に残すことで情報共有し、困難な場合はユニット会議の話合いで本人本位に検討するよう努めている。	入居前の自宅訪問や前事業者からの情報を得るとともに、日常の関わりの中でも本人の意向の把握に努めている。経過記録の情報に加えユニット会議で話し合い、利用者の視点に立った暮らしが継続できるよう職員間で共有している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前面接時に聞き取りした情報を基に、フェイスシートを作成し、全職員が把握に努めている。生活歴について情報を記載する書式がないため、フェイスシートに欄を設け、次回、入所時から使用していく。	本人、家族、前担当者から暮らしの状況の情報を得て、日々の生活の中でその人らしい暮らしが継続できるよう把握に努めている。また、「定期聞き取り必要事項」の項目を活用し、畑で野菜作りの収穫や編み物、紙工作、書き物など楽しみの中に、有する力を発揮できるよう継続的な生活支援に努めている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の様子を生活記録、経過記録に残し、職員間で情報を共有し、現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプランの実践状況を生活記録に記録し、計画作成担当者と担当職員で3か月に1回モニタリングを実施。課題あればその都度ユニット会議で評価している。更新時には必ず家族に来所していただき、本人、家族に説明、意向確認し、介護計画書を作成している。	実践状況の生活記録を活用し本人、家族の意向を聴きながら、計画作成担当者と居室担当職員とでモニタリング、カンファレンスを行い計画を作成している。更新時には利用者、家族と共に話し合い、意見や要望を伺い提案の把握に努め、現状に即した介護計画に繋げている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子やケアの実践状況を生活記録用紙、経過記録用紙に残し、情報を集約した申し送りファイルを中心に職員間で情報伝達行い、情報共有を図っている。課題あれば検討し実践や介護計画書の見直しに繋げるよう取り組んでいる。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	サービスの多機能化まではできていないが、本人・家族のその時々生まれるニーズに可能な限り柔軟な対応をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源としてボランティアの受け入れを積極的に行うようになったが、地域資源を活用した外出支援の取り組みができていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的に本人・家族が希望するかかりつけ医に、家族付き添いで受診されている。緊急時や家族の都合等、必要に応じて職員が対応するようにしている。受診後、家族より受診内容の聞き取りを行い、報告書作成し、情報共有を図っている。	利用者、家族が望むかかりつけ医に、家族による通院介助の協力を得ている。受診の際はバイタル表、グループホームからの手紙を持参し、主治医と情報交換を行い、施設、家族と共に共有している。緊急時や家族の都合がつかない場合は職員が代行するなど、安心できる体制が整っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設特養看護師に医療的な相談ができる体制を整えており、利用者が適切な受診や看護を受けられるよう努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の情報提供、退院に向けての情報交換や相談を行い、早期に退院できるよう、医療機関との連携に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用契約時に事業所として対応できる範囲を説明している。重度化する前に家族と話し合い、意向を確認した上で、方向性を決めるよう取り組んでいる。	契約時に重度化した場合や終末期の対応について、本人、家族に事業所ができる範囲の説明を行い理解を得ている。同建物内に特養施設があり、本人、家族の望む支援体制の共有理解の下、医療機関との連携を図りながら、要望に沿った支援に努めている。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	併設特養と共同で緊急時対応研修を行っている。夜間、看護師のオンコール体制、緊急時マニュアルを整備して、緊急時に備えている。	緊急時事故発生時マニュアルを基に緊急連絡簿を作成し、事故防止委員会を設置し、併設の特別養護老人ホームと共同で、夜間、看護師のオンコール体制、AED、緊急時対応研修等、緊急時に備え全職員が実施できるよう、知識、技術の習得に努め、実践に活かされるよう体制は整っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難計画書を作成し消防署に届けた上で、年2回特養と合同で避難訓練実施している。BCPのマニュアルを整備し、防災委員会が緊急時招集訓練、防災教育、備蓄品準備行い、大規模災害に備えている。地域との協力体制については、現状、まだ築けていない。	年2回防災計画に従い併設特養老人ホームと合同で利用者の参加も得て避難訓練を実施している。BCPマニュアルを整備し事業計画は継続的に実施している。備蓄、避難経路、避難場所の確認も整っている。地域の協力体制については運営推進会議で提案し地域の区長を通し検討を進めている。	災害対策の避難訓練、避難経路確認等定期的に実施している。住宅街であるが、地域住民の協力を得た避難訓練の実施は今後の課題と思われる。地域の防災訓練参加や地域の区長を通じて回覧板を活用し、共に訓練を行うなど実践的な取り組みが期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	法人理念である「信頼と和み」を念頭におき、利用者のできること、できないことを把握した上で、一人、ひとりの人格を尊重し、プライバシーにも配慮しケアをしている。	職員は事業所の理念である「信頼と和み」に基づき、常に利用者の気持ちを大切に考え笑顔と信頼で穏やかに接するよう努めている。接遇やプライバシー保護の研修を実施し、マニュアルの確認とともに振り返りの機会を設けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	希望や意見を自由に言える環境を作り、自己決定ができるよう働きかけ、意思に沿ったケアを行うよう取り組んでいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人、ひとりの生活のペース、思いを大切にし、業務優先にならないよう、可能な限り意思に沿ったケアを行うよう努力している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人・家族の意向を踏まえ、常に利用者の身だしなみに気かけ支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	普段は宅配サービスの食材を使用し、できる利用者に日々の役割として、準備、片づけを職員と一緒に行うようにしている。行事の際には特別食を提供し、外食行事も実施し、食事を楽しんでいただけるよう支援に努めている。	当日の献立は利用者と共に考え、食事メニューの「おしながき」作成も、職員に見守られながら利用者が書き込むなど意欲的な活動も観られた。調理はそれぞれの機能に合わせ活動する利用者のエプロン姿は在宅生活の延長線上にあると感じられた。季節感を演出して桜の一輪を食卓に添えるなど、利用者と職員の工夫を取り入れた食卓は和やかで明るいものになっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事に関しては、カロリー計算された宅配サービス利用している。栄養バランスを考え、乳製品、果物などをつけ提供し、食事形態も個々の状態に合わせて調整している。水分を多く摂っていただけるよう、入浴後にスポーツ飲料を提供したり、個別に好まれる飲料を用意したり、工夫して取り組んでいる。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人、ひとりの能力に合わせた、口腔ケアの支援を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者の個々の状態に合わせて、排泄の自立支援を行っている。生活記録用紙に排泄の記録を残し、全職員が排泄状況の把握ができるよう取り組んでいる。	在宅での生活習慣を活かした排泄を心がけ、トイレでの排泄を基本として、意識や意欲を尊重した見守りを行い誘導に努めている。夜間ポータブルトイレの方も居られるが、日中オムツ使用者は居られないとのことである。全職員が共通した排泄ケアに向き合い、自立に向けた支援と機能低下予防の取り組みが行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	日々の生活の中で体操をする機会を設けたり、朝食時に乳製品を提供し、便秘予防に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者の要望で、入浴日を設定しているが、体調、気分に応じて入浴日を変更を柔軟に対応している。入浴時、1人の職員が準備から上がるまで対応し、コミュニケーションを図るよう取り組んでいる。	入浴日の設定はされているが、本人の希望があれば、時間帯、回数の変更も可能である。利用者の機能を活用し、一人の職員が入浴介助にあたり、ゆっくりとコミュニケーションをとり、安全に入浴できる環境になっている。ゆず湯など季節の変わり湯を楽しむ取り組みも実施している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人、ひとりのペースに合わせ支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員が薬の管理をしている。薬の変更あった際は、受診後、家族から聞き取り、薬情報で、内服に伴うリスクを留意した上で内服支援を行っている。併設特養看護師に薬についての相談もできる体制を整えている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人、ひとりの力や生活歴に合わせて、役割や楽しみを持って、張り合いのある生活が送れるよう支援している。嗜好品については、家族の意向を踏まえた上で提供している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	年間行事計画を立て、外出する機会を設けている。その他、散歩、買い物、地域行事参加などで、戸外にでれるよう支援している。	外出支援として、地域の行事参加、2ヶ月に1回オレンジカフェの開催、外食、四季折々のお花見、ボランティアサークルの来園など、季節に応じて外出を楽しむ機会を設けている。また、家族同行での外出や外食の機会などの協力もあり、家族と共に支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	預り金として全利用者の小遣いを施設で管理をしている。利用者が直接お金の所持して支払いすることは行っていない。職員が代行し、希望に応じて、いつでも小遣いを使えるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の意向踏まえた上で、電話や手紙の支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	安心して暮らせるような空間作りを心掛けている。装飾品も季節に合わせ、利用者と共同作業で作成したものを展示している。	玄関内は天井の梁も高く天窓からは明るい陽射しが優しく居心地よく過ごせるような空間である。廊下、リビング内も明るく、利用者の作品が提示され、生活感や季節感を取り入れた、居心地よく過ごせる空間が整備されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者の関係性を重視し、テーブル、テレビなどのレイアウトをしているが、関係性において、全てを考慮するレイアウトは難しく、課題となっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には使い慣れたものなど、自由に持ち込んでいただけるよう説明し、安心安全を考慮した上で、本人が居心地良く過ごせる空間作りを行っている。	入居時に本人、家族と相談し、普段から使い慣れている馴染みの物を持参してもらい、思い思いの配置でその人に合わせた環境づくりを心がけている。現在、新聞を購読している方も居られ、馴染んできた在宅生活の延長線上にある過ごし方を楽しんでいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内部は、利用者のできること、わかることを把握した上で、安全に配慮し自立した生活が送れるよう工夫している。		